

## 『エリヤ：体をないがしろにしない』

きっと皆さんには何十年もおつきあいをしている友人がいますでしょう。伴侶と共に暮らして半世紀が経つという方もいますでしょう。私達にはこのように長いつき合いをしている人がいますが、そんな人たちの中でダントツに長いつき合いをしている人がいるのですが、誰だかご存知でしょうか。そう、それは自分自身です。

鏡に映る自分を見ていると、昔とはずいぶんと姿かたちが変わりました。しかしながら、その鏡に映る人と私は一時も離れずにこれまでの人生を歩んできました。そう、その鏡の前には「私」がおり、今もそうですが、これからも最後の日まで私の人生はこの人と共にあります。この人と私は文字通り最後までつきあっていくのですから、この人とはこれからもうまくやっていきたいと思っています。

若い時、私達は自分の体に関心を持っていました。その関心とは、例えばこの体をいかにたくましく、またいかに美しく見せようかという類のことで、私達は身に着けるものにまでその関心を寄せました。それが年を少しづつ重ねますと、「いかにたくましく、いかにかわいらしく」が「いかに健康で、いかに着心地がいいか」ということに関心が寄せられていきます。かつての「ファッション雑誌」が「100円でできる血圧が下がる献立」というような雑誌に変わります。血圧を下げたい、しかも安く下げたいという、長い人生を生きてきた人間のしたたかさがそこにはあります。数十年ぶりの同窓会に行きますと、今はこんな薬を飲んでいるとか、これまでにしてきた病気とか、今はこんな治療を受けているというような話ばかりになるということは、誰もが言うところ です。

私達はこのように常に自分の肉体に関心を寄せているのです。しかし実際のところ、私達は自分の肉体にどう向き合えばいいのでしょうか。私が幼いころ、美容のために「卵の白身」を顔に塗ったり、喉の痛みが治るからと「ネギ」を首にまいている人がいましたが、最近は見かけません。「カスピ海ヨーグルト」や「ぶら下がり健康器」ははたしてどこにいったのでしょうか。私達はこんな流行によって右に左に揺れ動きながら、自分の体に向き合っているのかもしれない。

何事もその「物」を造った人がその「物」の取り扱いを最もよく知っています。このことに従えば、私達の体についてまず目を向けるべきは私達の肉体を設計

した設計者の取扱説明書に目を注ぐべきです。その取扱説明書を読むことができたなら、そこには私達にとって一番、有益な自分の肉体とのつきあい方が書かれていることでしょう。そして、何を隠そう、その取扱説明書こそが私達の手元にある聖書なのです。

肉体に関して、まず最初に私達が確認しなければならないことは、その体の始まりということです。始まりにはこの体がどんなものであるかというヒントが書かれているからです。そして、聖書で始まりといえば創世記です。そこには最初の人、アダムが神によって造られた様が描かれています。それはとてもシンプルな記述でこのようなものです『主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた』（創世記2章7節）。

そう、「土」で造られたということは私達の肉体は有限なものであり、やがては土に返ることを意味します。土には命がありません。しかし、その土なる肉体に神の息が吹き入れられてはじめて人は生きる者となりました。このことは私達についてとても大切なことを語っています。すなわち、このことは肉体そのものはそもそも物質であり、そこに神の息が吹き込まれて、その物質は生きるようになったということです。私達の肉体に神の息が吹きかけられて私達が生きる者となったということは、私達は神の息がかかった霊的な存在であるということです。

パウロはこの人の始まりをふまえてローマ書12章を書きました「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」。

パウロはここで『あなたがたのからだを神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として捧げなさい』と言い、『それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である』と書きました。パウロはこの「からだ」について先ほどの創世記のことを念頭に置いていますので、この「からだ」には「肉と霊」が含まれています。そう、からだとは物質なる肉だけではなく、霊的な魂をも含めたものであり、その肉と魂を供え物として神の前に捧げること、それが私達がなすべき霊的な礼拝だということです。

人は宗教がなければ目に見えるものだけに関心を向けます。そうです、その最たるものが私達の肉体なのです。健康や美容に関する市場は巨大です。雑誌をめくればこの二つに関する広告がその大半を占めるのではないのでしょうか。こ

の肉体に強い関心が寄せられますと、やがて肉体を崇拝するようになり、やがてそれは宗教になることもあります。均整のとれた肉体の彫像が崇拝の対象となっている、そんな宗教はかつて今も世界中にたくさんあるのです。

反対に私達が霊的なことだけに関心を向けるようになりますと、肉体は精神の付属品にすぎない、精神こそが大切なもので、肉体はそれよりも劣ったものとして私達は体を取り扱うようになります。この傾向は知らぬ間に私達の間、特にクリスチャンである私達の心に入り込んでくるのです。

しかしながら、私達の体と心は本来、別々のものではなく、それらは一つのもので、すなわち私達の肉体は心と連動しており、心で感じていることが肉体にあらわれ、同じように体が感じていることが心に影響を与えていきます。心に抱えている問題が解決した時に私達は言いますでしょう、「肩の荷が降りた」、病気が完治した時に私達は「安心した」と。

この心と体の関係というものを私達を創造された神様はよく知っています。いいえ、もっと言いますとこのお方ほどに私達の体と心の関係を理解している方はいないのです。私達の体を造られたお方は私達の肉体の必要とその限界を誰よりもよく知っておられるのです。

今から2900年ほど前、北イスラエルにはエリヤという預言者がいました。彼は大胆不敵な人で、武骨な預言者でした。彼はちょっとやそっとのことでは弱音をはかないような人でした。そんな彼はある時、850人もの異教の預言者を前にたった一人で神の御名のもと戦わなければならないことがありました。そんな相手に普通の人ならしりごみしてしまうものですが、エリヤは果敢に彼らと向き合い、自分の力ではなく、神の絶大なる力によってその戦いに勝利を治めました。その勝利は圧倒的でしたので、その戦いはこれで終わるだろうと誰もが思いました。

しかし、その戦いの結果を聞いた時、この戦いを主導していた北イスラエル王国の王、アハブの妻、イゼベルはエリヤに使いを送ってこう言うのです「もしわたしが、あすの今ごろ、あなたの命をあの人々のひとりの命のようにしていないならば、神々がどんなにでも、わたしを罰してくださるように」（列王記上19章2節）。この言葉にはイゼベルが必ずエリヤの息の根を止めるという決意が込められています。エリヤを殺さずにはおけないイゼベルの情熱がここにはあります。

エリヤはこの言葉を聞き、恐れにとらわれました。心が折れてしまったのです。そして、その所から逃げ、身を隠しながら、自らの死を求めて神にこう願いま

した「主よ、もはや十分です。今わたしの命をとってください」（列王記上19章4節）。彼は大胆不敵な人でしたが、完全無欠な人ではありませんでした。彼は打ちのめされて、虚脱感に襲われ、自らの命が絶たれることを願ったのです。そう彼は圧倒的な勝利を得たにも関わらずに、どん底に落ちました。今日でいうところのバーンアウトです。

その時、神様はどうなさったのでしょうか。「なんと情けない様だ！」と一喝されたのでしょうか。いいえ、神様は天の使いを彼のもとに送り「焼石の上で焼いたパンとービンの水」（列王記上19章6節）をエリアに与えられたのです。それは「ただのパン」ではなく、焼石の上で焼かれたもの、今日で言えば熱々のトーストでした。神様は彼のためにパンを焼き、水を与えました。そして、エリヤはそれを食べ、飲んで眠りました。しばしの休息の後、天の使いは再び彼のもとに来て言ったのです「起きて食べなさい。道が遠くて耐えられないでしょうから」（列王記上19章1節以降）。神様はこの時、エリアがどのようにしたら、回復することができるかをよくご存知でした。実際、彼はこの休息の後、心身共に立ち直り、後には再びアハブとイゼベルに対峙するのです。

イエス・キリストは12人の弟子と共に生活をし、その弟子達に言葉と行いを通してその訓練をされましたが、その生活の中で度々、めまぐるしい生活をしている弟子達に人を避けて休息を取るようにと勧めています。また、イエス様は日常的に会食の席に座り、誰かと食事をとっている姿が聖書には描かれています。イエス様は人間には休息が不可欠であり、また食をとらなければ働くことができないということを誰よりもよく承知していました。

イエス・キリストがサマリアの井戸べに来て、サマリアの女と出会われたとき、イエス様は女に言われました「水を飲ませてください」。イエス様は私達と同じように喉の渇きを覚えられたのです。十字架にかけられた時、七つの言葉を言われました。その一つが「私は渇く」という言葉です。イエス様は我々と全く同じように体が欲するものを求められました。イエス様は汗を流すこと、食事をとること、のどが渇くこと、疲れを覚えること、これら全てを体験したのです。そして、これらのことが人の心に与える多大な影響をよくご存知でした。

かつて4000人ほどの人が三日もの間、食事もせずにイエス様の話を聞くべき、その後を追い続けたことがありました。その時のことについてマルコはこう記しています。

1 そのころ、また大ぜいの群衆が集まっていたが、何も食べるものがなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、2 「この群衆がかわいそうで

ある。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。3もし、彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くからきている者もある」（マルコ8章1節－3節）。

イエス様は自分の後を追い続けてきた群衆を見ていったのです。「彼らがかわいそうだ」と。そして、その時にイエス様の心にあったことは、彼らはお腹を空かしているだろう。このまま家に帰しては途中で弱り切ってしまうであろうということだったのです。神の一人子、イエス・キリストは彼らの空腹を心配したのです。

「ばっちゃん」というNHKのドキュメンタリーを最近、見ました。広島に住む住宅にそのばっちゃん、82歳になる中本忠子（ちかこ）さんは住んでいます。中本さんは40歳の頃から近所に住む子供たちに夕食を作っています。夕方、学校が終わると子供たちが中本さんの家に集まってきます。彼らは親しみを込めて中本さんを「ばっちゃん」と呼びます。子供達の家庭には事情があり、貧困や育児放棄により家では食事をとることもままならない、いつも空腹の子供達です。

ばっちゃんは長い間、罪を犯した少年の社会復帰を手助けする保護司をしてきました。その活動を始めてすぐに分かったのは、彼らの非行の原因が空腹にあることでした。以来、子供達に手料理を振る舞うようになりました。いつしか担当する子供だけではなく、その友達も集まるようになり、それを知った地域の女性たちもばっちゃんを手伝うようになりました。外では虚勢をはっている子供達もばっちゃんの前では素の自分をあらわし、ばっちゃんが叱ってくれることに反発もせずに耳を傾けます。

ばっちゃんはいいます 「そりゃ人間、お腹が空いてごらんよ。落ち着きなさいって言うたって落ち着かんと思うよ。手作りというのが一番いいんじゃない。どんな荒れた子でもおさまると思うよ。だって私それでおさめてきたもん、子どもらをここで」「腹が減った時っていうたら、みんな悪さをする事しか頭にない。女の子じゃったら売春ね、男の子じゃったらカツアゲ、ひったくり、万引き。お腹が空いた時で考えるいうたらそれしかない。これは10人が10人みんな」。確かにお腹が満たされると、少年少女の心が開かれます。子供達は口を開き、ばっちゃんは彼らの言葉を一つ一つ拾っていきます・・・。

「靈的にダウンしているのです。祈りが足りないのでしょうか。もっと聖書を読むべきなのではないでしょうか。私は不信仰でだめです」と聞かれることが時々あります。そして、それに対して「おっしゃる通りです。あなたに足りないのは祈

りの時間です。聖書を読む時間です。もっと祈りなさい、もっと読みなさい」と言われ、こんなアドバイスを受けることがあります。確かにそのような時もあるでしょう。しかし、それは人間をトータルで見ている人のアドバイスではないのです。

その人はどんな食事をとっているのか、睡眠はとれているのか、運動はしているのか。そして、食事が偏り、夜更かしが続き、運動する暇などないというようなことが分かってきましたら、その方が言う「霊的ダウン」にまず必要なのは体の管理なのです。お腹が空いているのなら、お腹を満たすことから始めなければなりません。

どうか覚えてください。寝不足であること、食事がとれていないということ、何かしらの病にあるということ、これらのことを確認せず、自分の信仰が足りないから、こんなに落ち込むのだという結論を出してはなりません。キリスト教の世界ではそんな判断をもって人間を見てきた歴史があります。眠れない、食欲がない、病気にかかっているのであるのなら、信仰は弱まってしまうのです。エリアに主はあなたには祈りが足りないとは言いませんでした。神様は彼に食べ物を与え、休息を与えたのです。

イエス様の一番弟子、ペテロは十字架の前にイエス様を裏切ります。イエス様は孤立無援、十字架にかけられます。しかし、ガリラヤ湖畔でペテロの前に復活のイエスはあらわれます。その時、ペテロは一晩中、ガリラヤ湖で漁をしていましたが何も取れず、そんな時に岸边にイエス様がいることを知り、舟から湖に飛び込んでイエス様の元に向かいます。

全身ビショビショになってペテロが陸にあがってきた時、イエス様は自らたき火を焚いて、魚を焼いて待っていてくれました。主の心はいつも変わりません。主はエリアにも焼石で焼いたパンを与えました。主は私達が美味しく食べることができるよう食材に手を加えてくださるお方です。

春先とはいえ、まだ寒さが身にしみる早朝です。しかも湖に飛び込んだのですからペテロの体は冷え切っていました。食べることもせず一晩中、漁をしていたのですからお腹もすいていたことでしょう。イエス様はそのペテロの前に敗者復活ともとれる言葉を語りかけます。そう、私達はあの有名な「ペテロよ、わたしを愛するか」という言葉ばかりに注目しますが、その時、イエス様はペテロの魂だけに目を注いでいたのではなく、彼の肉体の必要にも目を注いでおられました。

私達は想像します。ペテロはこの時、イエス様を知らないで三度、イエス様を否んでから初めてイエス様に面と向き合ったのです。そんなペテロに対して、イエス様は自分を裏切ったことに対する非難をせず、まず熱々の魚をペテロに手渡したのです。彼はそれを食べながら、冷え切った体が焚き火によって温まっていくことを感じていたでしょう。

イエス様は彼が魚をほおぼるのを優しいまなざしで見つめておられたことでしょう。ここで私達はばっちゃんの言葉を思い起こします。「そりゃ人間、お腹が空いてごらんよ。落ち着きなさいって言うたって落ち着かんと思うよ。手作りというのが一番いいんじゃない」。イエス様は手作りの焼き魚をペテロにふるまい、お腹が満たされたペテロに言われたのではないのでしょうか。「わたしを愛するか？」と。

かつてパウロはコリント第一の手紙6章19節—20節で驚くべきことを語りました。「あなた方は知らないのか。自分の体は神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなた方はもはや自分自身のものではないのである。あなた方は代価を払って買い取られたのだ。それだから自分の体をもって神の栄光をあらわしなさい」。ま

私達の肉体をパウロは「聖霊の宮」だ言いました。さらに「この聖霊の宮はもはやあなた自身のものではない」と彼は言いました。さらに私達にとりまして驚嘆すべきことは、この自分の体とは代価を払って買い取られたものだということです。

主にある皆さん、私達の体はそれがどんな年月を生きたものであっても、色々な病気と闘っている体であっても、それは聖霊の宮なのです。そして、この私達の体には代価が支払われているのです。そうです、私達の体はキリストの命と引き換えに買い取られているものなのです。肉を持つ限り私達は罪に生きるものであります。しかし、キリストはその私達の罪のために、その滅び行く私達の代わりとなって十字架におかかりくださった。そのキリストの命という代価と引き換えに私達は救われているのです。私達の体には既に代価が支払われているのです。ですからこの体はもはや自分のもではありませんので、私達は自分の体をもって神の栄光をあらわすことが問われているのです。あの裏切り者ペテロは復活のイエスと出会って以来、己が体をもって神の栄光をあらわすためにその人生の全てを捧げたのです。

今日は月に一度のカレーランチです。楽しみです。「人が食べる」ということは「車にはガソリンが必要だから」というようなことではないのです。食をと

るといふことは靈的なことなのです。昨晚、ジャガイモやニンジンの皮を向いて、今日のカレーを準備してくださった方がいらっしゃるでしょう。意外に思われるかもしれませんが、その時、皆さんは神聖なはたらきに携わっていたのです。エリヤのために焼石で焼かれたパン、湖畔でペテロのために焼かれた魚、これらの主のご愛は神の神聖なみわざだからです。

ご自宅でいつも食事を作られる皆さん、祈りと心をこめて食事を作りましょう。皆さんがしていることは家事というような言葉で収まりきるようなものではないのです。皆さんが心をこめて作った食事はキリストの命と引き換えに代価が支払われた私達の肉となるのです。その食は肉体を強めるだけではなく、私達の靈性をも引き上げるものなのですから。

パウロはよくよくこのことを自覚するようになったのでしょう。彼がテサロニケの人々へあてた手紙を閉じる時、パウロは彼らの靈が守られるようにとは言いませんでした。その言葉をもって、今日のメッセージを終えたいと思います。

「どうか平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの靈と心と体とを完全に守って、私達の主イエス・キリストの来臨の時に、責められるところのない者にしてくださるように」（テサロニケ第一の手紙5章23節）お祈りしましょう。